

TROMBONE

ワンポイント・アドバイス

I 行進曲「煌めきの朝」

作曲：牧野圭吾

比較的速めのテンポのマーチです。実際のテンポに合わせるだけでなく、音自体にスピード感を持たせて演奏できるよう心がけましょう。

冒頭から要所要所に十六分音符で刻むリズムが多く出てきます。強弱やアーティキュレーションに惑わされず、ハーモニーを意識して正確に演奏しましょう。特に14小節目の十六分音符は、次に来るのが休符のため、リズムが崩れやすくとても演奏しづらい部分です。ゆっくりなテンポからピタッと合うようセクションで練習してみてください。

19小節目や97、145小節目から出てくる長い音のハーモニーはトロンボーンだけの動きです。美しいハーモニーを心がけるのはもちろんですが、最初に記述したとおり、音にスピード感を持たせて演奏しないと流れに乗り遅れてしまい、全体のテンポ感を失わせてしまうことにもなりかねません。それぞれの音を八分音符で刻みながら、低音やホルンの動きを意識して練習してみると流れが掴みやすくなると思います。

また、19小節目からは強弱も細かく指定されていますが、あまり作為的にならずメロディーの流れとうまく絡めるよう、意識を持ちましょう。

冒頭のファンファーレや【F】の動きなどにある臨時記号は、なんとなく演奏するのではなく全体の転調を意識して、きっちり鳴らせるとサウンドに厚みも出て良いと思います。

【K】からの転調は、少し吹き慣れない音が多く出てくるとは思いますが、特に4番ポジションの「シ」や5番ポジションの「ファ#」など、音程を正しく取ることだけでなく、豊かな響きを目指して意識的に練習しましょう。日頃の基礎練習から、全てのポジションでロングトーンなどに取り組みるといいですね。

II ポロネーズとアリア ~吹奏楽のために~

作曲：宮下 秀樹

【A】からのポロネーズのリズムが、全曲を通してトロンボーンに多く出てきます。

題名にもある通り、トロンボーンが担う表現すべき責任は大きかもしれません。書かれている強弱記号は全体の音楽を表現するための重要な要素ですが、さらに重要なのはこの舞曲のリズムをきちんと音に表すことです。特に1拍目、2拍目の裏拍にくる音符を少し強調させて練習してみると良いでしょう（特に三連符はトリプルタンギングを使うことが想定されるので、音が飲み込まれないようしっかりと息を流しながら発音し、明確にさせましょう）。小節単位の大まかな強弱指示だけで終わらせず、譜面に書かれていないリズムの特性を表現することはとても大切なことです。

さらに、【G】や【J】に出てくるスラー奏法もトロンボーンにとっては大変重要な箇所です。リップスラーで動くところ以外はレガートタンギングを使いますが、音と音の間にポルタメントが入らないよう息をしっかりと流し、「lu」の発音とスライディングがピッタリ連携するよう練習してみましょう。

特に【J】からの動きには十六分音符もたくさん出てくるので、それぞれの音の繋がりをゆっくり丁寧に根気よく取り組みたい部分です。日頃こういったメロディーを演奏する機会が少ないと思うので、ユーフォニアムやバスーンに違和感なく重ねられるよう、美しいレガートを目指してください。

TROMBONE

ワンポイント・アドバイス

Ⅲ レトロ

作曲：天野正道

この曲は他の課題曲と違い3rdパートが1st・2ndパートに比べ、低音セクションとして区別されているところが多いです。

時には低音グループと共に全体を支え、時にはトロンボーンパートとしてハーモニーでリズムを刻んだり、一曲の中で目まぐるしく役割が変わっていくので、やりがいがあると思います。

かといってこういった配置は特別なことでもないので（Bass Tromboneとして考えたら通常の動きです）、他の低音楽器を意識した音色が出せているか、トロンボーンのハーモニーバランスは整っているか、アタックは揃っているかなど、それぞれのポイントできちんと役割を担っているのか、いつも以上に合奏全体を意識して演奏できると良いでしょう。

こういったポップス調の低音は、通常よりも短い音符が連続して出てくることが多いため、速めのテンポで低めの音域のタンギング練習などを日頃から取り入れておくと慣れも早く、合奏練習にスムーズに移行できるかと思います。

全体に言えることですが、日頃から気をつけている発音の仕方や響きを意識したりリリースの付け方など、ポップスでは真逆になり得ます。指揮者から求められた際に色々な吹き方で対応できるよう、テヌート、スタッカート、レガート、アクセント…などのさまざまなアーティキュレーションをしっかりと吹き分けできるよう練習しておくと、演奏の幅が広がるのではないのでしょうか。

Ⅳ マーチ「ペガサスの夢」

作曲：水口透

6/8拍子のマーチです。苦手意識のある人も多いかもしれない拍子です。

題名の「ペガサス」にあるとおり、馬の駆け足のように軽快な音楽になるよう心がけたいです。特に7小節目や39小節目のような弱拍で入るリズムは、特に注意しましょう。

弱拍と同じ音を一拍目に八分音符で入れて練習し、三拍目のタイミングを掴んでからまた楽譜を元に戻して…と、繰り返し練習して、こういったリズムに慣れるのもオススメです。色々工夫してみましょう。

この曲は無理のない音域で、かつハーモニーがシンプルでわかりやすいので、トロンボーンパートだけでも練習しやすいと思います。長い音符だけでなく短い音符でのハーモニーにも気を配り、どんなコードなのか、どこへ繋ぐのか、常に意識して精度の高いアンサンブルを目指してください。

【H】のメロディーは途中までユニゾンで、フレーズの最後がハーモニーに移行しています。126小節目の弱拍から重くなりがちなので、1stのメロディーラインを吹くつもりで最後までスピードを落とさず吹き切りたいです。直前のトランペットのスピード感などを意識できると、より統一性が増すと思います。

作曲者が示されている通り、極小編成にも対応しているとのことなので、パートごと人数のバランスによっては、他パートと練習することも考えられます。

その場合、同じ動きをするのが木管なのか金管なのか、ベルがどこに向いていてどれくらいの音量が出るのかなどを踏まえて、音色や発音、バランスに気を配った演奏を心がけてください。